いしかり博物誌 145

サケの手

今晩のおかず、サケですか？サケを食べたら残るのが骨。でもその骨を捨てる前に、ちょっとよく見てみましょう。そこには、何億年にも及ぶ生命の歴史が隠れているんです。

もっともよく食べる胴体の切身の骨には、背骨（椎骨）と肋骨があります。魚やカエル、鳥、人間も含めてどんな脊椎動物にもある、体の中心軸となる骨です。背骨に沿って大事な神経や血管も通り、肋骨は内蔵を守ります。

もしもメニューが石狩鍋だったら、頭などのアラが入っているかもしれません。その中でもエラのすぐ後ろ側、胸びれが付いている部分「カマ」が当たったらラッキー。一番面白い部分です。これは人間で言えば、肩から腕、指にあたる部分。つまり〝サケの手〟なのです。

人間の腕は、鎖骨、肩甲骨、腕の骨（肩から肘の骨が1本と、肘から手首の骨が2本）、そしてたくさんの手首や指の小さな骨が組み合わさってできています。でも、この組み合わせを持つのは人間だけではありません。腕、つまり前足を持つ陸上の四足動物全てに共通した、骨のパーツ構成なのです。さらには前足の代わりに胸びれを持つイルカ・クジラ、翼を持っている鳥も、外見はあんなに違うのに体内の骨のパーツはほぼ同じ。カエルも鳥も人間も、もともと祖先は同じなのですが、何億年もかけて進化し、いろんな形に分かれてきたからです。

これは四足動物だけでなく、手足のない魚も同じなのです。サケのカマの肉を食べて、残った骨を見てみましょう。人間のものとはだいぶ形が違いますが、そこには鎖骨、肩甲骨、腕の骨があるのです。外見も生活する場所もまったく違うサケと人間ですが、やはり骨のパーツは共通でした。

水中で暮らす魚類の中から陸上でも生活できるグループが現れたのは、今からおよそ3億7千万年前のこと。胸びれや腹びれが手足に変化したのです。それが、カエルやイモリなど両生類の始まり。その後、トカゲやカメなどの爬虫類、ネズミやウシなどの哺乳類へと進化していき、人間へとつながりました。

サケが旬の今。食べ残った骨も注意して観察すれば、そこから生命進化の歴史を読み取ることができるのです。

（志賀健司）

図1：サケのアラ（カマ）を処理して標本にしたもの

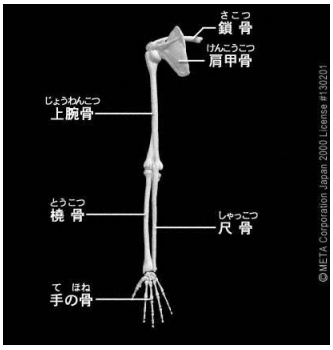

図2：人間の肩から腕の骨格図
出典：IPA「教育用画像素材集サイト」
https://www2.edu.ipa.go.jp/

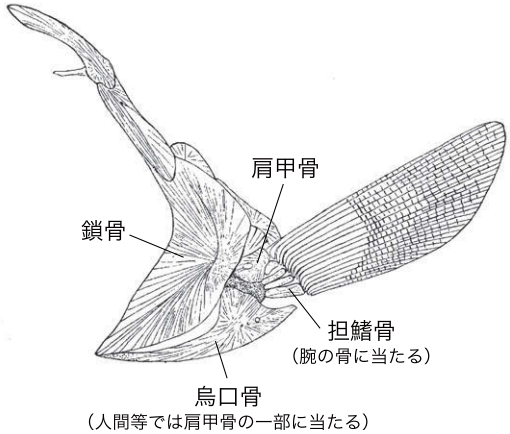

図3：サケの胸びれ周辺の骨格図（Hikita, 1962を改図）
人間と同じように、鎖骨、肩甲骨、腕の骨などがある。

石狩市学芸員
志賀健司　Kenji Shiga
専門は地質学・漂着物学・海辺学。地球の環境の変遷などを調べるとともに、石狩の浜辺にどんなものが漂着し、それがどんな意味を持っているかを研究している。

9/17（土）体験講座
サケ切身骨格標本をつくる

焼サケの中にも生命の進化が隠れている!?
サケの切身から部分骨格標本を作ります。
費用無料。

申込方法など詳しくは23ページをチェック!

「いしかり博物誌」は、えりすいしかりネットテレビ（http://www.i-eris.tv/）でもご覧いただけます。